Air force

篠宮　夏希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｉｒ　ｆｏｒｃｅ

【Ｎコード】
Ｎ８６１２Ｙ

【作者名】
篠宮　夏希

【あらすじ】
物語の舞台は、今より少し先の未来。
未来では、未成年による失踪事件が多発していた。
そして、主人公は変な人物と出会い、気絶させられてしまう。
次に目が覚めたのは、訳もわからない森の中！？
全く新しい（？）かは分かりませんが、ＳＦ系ファンタジー始動！

第一話：シルクハット

２０８９年。

気が付けば、日本は科学先進国となっていた。

今俺が歩いている街中も、ゴミ拾いロボットや警官ロボット、さらには店専用の宣伝ロボットなどもいたりする。

形なんかは様々だが、その役目に最も効果的なものが採用されるのが普通だ。

例えば警官ロボ。

こいつはボディが小さく作られており、動きが素早い。

内臓機能で、指名手配犯を全員インプットしてたり、手錠にスタンガン、ゴム弾なんてのも装備されているらしい。

物騒な世の中になったもんだ。

と言っても、俺は現代人なので昔のことは知らないが。

俺は、立ち止まり、喉を突き出しながら空を見上げる。

周りには超高層ビルが数建。

その上を、新型旅客機が通過している。

さすがに、どこかのＳＦ映画に出てくる、空飛ぶ車の実現には『まだ』いたってないとのこと・・・。

しかし、科学が進化する一方で、犯罪の方も凶悪で犯しやすくなっているのも事実。

万引き防止などをチェックするための機械。
あれが店内の出口には必ず取り付けられているため、店の方も安心できた。

だが、それもついこの前までの話だ。
科学が進化したおかげで、その機械の機能をジャミングするモノが最近出回っている。
そのため、多くの店舗が防犯カメラの設置数を増やしているらしい。

所詮、人間とロボットだ。
どれだけ頑張っても、犯罪者が居なくなるということはない。
いくら科学が進化してても、たったそれだけの話。

いつの時代もこの構造は絶対崩れないのだろう。
それだけは、変わらない気がする。

「またか・・・」

俺はテレビ放送局のビルに取り付けられている、巨大ＴＶを見ながら一人呟いた。

ニュースで報道されているのは、最近頻繁になってきている『未成年連続失踪事件』について。

この連続失踪事件は、今年の春頃から起き始めていることが最近明らかになった。
ということは、もうかれこれ３ヶ月は経っていることになる。

それだけ時間が経過していながら、姿をくらました人々は『誰一人』として、発見されていない。

「えー、今日一日だけで、分かっている失踪者は２０人以上と警察署からの報告です。
未だに原因は不明とのことですので、みなさまも十分ご注意ください。それでは―、」

ニュースキャスターが一礼して、ニュースは終了。
それと同時に、時刻は２１時を迎えていた。

「ふぅ、そろそろ帰らないと俺も危ないな」

俺はＴＶ画面から目を離し、再び足を進める。

危ないというのは、先程のニュースでやっていた原因不明の、不気味な失踪事件のこともあるし、何より俺は未成年者だ。

この時間に出歩いて、警官やロボに捕まると色々と面倒なことになる。
なので、そろそろ退散することにした。

・・・・のだが、
『ピーピー、現在時刻２１時４分。未成年者と思われる人物発見。身分を証明してください。』

背後から、機械音声が流れるのが聞こえた気がした。
周りの視線が、俺に集まっているのはきっと気のせいだろう。

そう・・・・

「信じたい！」

俺は全力ダッシュ。

ロボの方は、なんともスピーディな動きで俺を追いかけてくる。
不意打ちをかけて、少しだけ出遅れてはくれたが、このままだと捕まるのも時間の問題だ。

（何か・・・・何かないのか！）

走りながら、俺はこの危機的状況を回避するべく当たりを見回す。

（・・・・・！！）

そこで目に入ったもの。

「これなら・・・・どうだ！」

俺は急カーブをして、細い路地裏へと走り込む。

普通この様な路地裏には、ヤンキーやナンパ、薬物の売人達のテリトリーだったりするものだ。

もちろん、それを取りしまわないロボではない。
しかも、細い路地は妙に入り組んでいて、遠隔操作の警官ロボの効果が薄れる。

『ビー！　ビー！　こちら、ａ－１４９。路地裏にて怪しい人物を多数確認。確保します。』

「ザザ・・・、了解。こちらも、今向かっている」

人間の警官からの指示を受け、ロボは強力ネットを発射。

細い路地に、巨大なクモの巣ができた。

「ッ・・・!?　やべっ！」

巨大なクモの巣は、走っている俺の身にも降りかかってくる。

俺は、さらにスピードを出して、左へと曲がりどうにか回避。

『ビー！　ビー！　そこの者、止まりなさい』

後ろからロボの声が聞こえてくるが、止まる気はない。

そのまま右へ、左へ、さらに左へ・・・・・。

俺は、狭い路地を5分間も走り抜け、ようやくロボを巻いた。

「ハァッ・・・・・ハァッ・・・・」

久々の全力ダッシュを5分間持続し続けた俺の額からは、汗が垂れる。

少し歩くと、広めの道路に出た。

建物の壁に寄りかかりながら汗を拭う。

「ハハッ、これは師匠に感謝しなきゃな」

息切れしながらも、恩師に感謝を述べる。

別に師匠はロボから逃げるために、俺を鍛えてくれたわけではないが・・・。

まあ、よしとしておこう。

「っふう・・・・」

大きく息を吐いて、家へと帰ろうとする。

「って、ここはどこだ?」

俺が出た道路は住宅街で、家の所々に明かりが灯り、笑い声が聞こえてきた。

（・・・楽しそうだな）

正直言って、ちょっと羨ましかった。

俺の家族は、俺に、双子の妹弟、母さんの４人家族。

本当は５人だったのだが、父さんは俺が中学に上がる頃・・・つま

り1年と少し前に他界してしまった。

研究者という職業柄、なかなか遊んでもらうことはできなかったが、面白くて、優しい父さんだったと思う。

死因は、母さんからは詳しく教えてもらえないし、そこまで知りたいとも思わない。

なんて、むかしのことを思い出しながら、携帯の画面を眺める。

現在の位置情報を確認しながら歩く。

『ドシンッ！』

携帯の画面に意識がいっていたため、周りを見ていなかった俺は人とぶつかって倒れた。

「イテ・・・。っと、すいません。大丈夫でしたか？」

俺は、ぶつかった人物の方に目をやり、硬直した。
その人物は、なんとも奇妙な格好をしていたため、驚いたのだ。

頭にはシルクハット、タキシードに杖。鼻より上は仮面で隠れていて見えないが・・。
こんな蒸し暑い日に、なんて格好をしているのだろう。
今日の最高気温は、３１度。
いくら夜とは言っても、２５度くらいはあるだろう。

そんな時、人物は俺に手を差し出していた。
珍妙な格好に見とれ、気がつかなかったが・・。

「あ、ありがとうござ・・・ッ！？」

俺が手を握ろうとしたとき、急に人物からとてつもない悪寒を感じた。

（何か嫌な予感がしないでもないような・・・）

そう、まるで早く握れと言わんばかりのようだ。

不気味に感じた俺は自分の足で起き上がる。

人物は手を差し伸べたまま首をかしげている。

それに対し、俺は「以後、気を付けます」と礼儀正しく述べ、立ち去る。

『これは面白い。』

唐突に声が届いてきた。

今まで何もしゃべらなかった人物が、ようやく口を開いたのだ。

ゆっくり振り返ってみると、男は杖をくるくると振り回し、なにやら意味有りげな笑みを浮かべている。

『これを見破られたのは、あなたが初めてですよ。』

そう言った男は、差し伸べてきた手と反対の服の袖からスタンガンを出して来た。
バチバチと、唸りを上げながら青っぽく光る。

「そうかい。それで、俺なんかに何の用？」

生憎、俺は友達というものが少ない。
この、どこか抜けている性格のせいだろうか？

いや、自覚はしてるからそこまで酷くないと思う。

どっちにしろこんな変人は近寄りたくもない、というのが正直な感想だ。

『いや、あなたにちょっとした実験に付き合っていただこうかと。』

「実験？」

意外なことを言われたものだから、俺は思わず聞き返した。

『ええ。他にも人員を投入しているんですが、なかなか合格者がでなくて困っているんですよ。』

合格者？

「なんのことだ？」

フフっと、男は笑った。

『それは、あちらに着いてからにしましょう』

こいつはさっきから何を言ってるんだ？

訳も分からず、俺は男を見つめた。

『おやおや、そんな目で見つめないでください。照れてしまいま・・すっ！』

「ッ・・！？」

男は勢いよくこちらへ、突っ込んできた。

右手に杖、左手にはスタンガンと、非常に危険だ。
まずはじめに、杖を向けてくる。
それを躱したかと思ったら、スタンガン。
いくら俺でも、これを長時間耐え続けるのは厳しい。

「チッ！」

舌打ちして、俺は男の持っていたスタンガンを蹴り飛ばす。

しかし、男は気にせず杖で攻撃してくる。

「クソッ・・・」

一度間合いを取る。

『先ほどにプラスして、これほどとは・・・・。今回はいい収穫ができましたかね。』

今回はっていうことは、何回もやってるのか？

考えれば、考えるほど疑問が浮かび上がる。

「ハッ、悪いがあんたに収穫される気はないぜ？」

ちょっとかっこつけて言ってみる。

『それは困りましたね・・・。仕方がない、あれを使いますか。
まぁ、まだ試作段階ですけど、あなたなら大丈夫でしょう♪』

男の周りから、バチバチと何か音がした。

それは、青く光散らし、男の右手に集まっていく。
先程のスタンガンという訳ではない。

「おいおい・・・、なんだよそれ」

俺は自分の目の前で起こっていることが、信じられなくて声を漏らした。

男のそれは、超能力や魔法などとしか言い表しようがなかったのだ。

『これは、まだ試したことがないんで、加減がいまいちわかりませんが・・・・。
ちょっとぐらい痛い思いをしても、悪く思わないでくださいね？』

そう確認を取った男は、俺に光るものを飛ばしてくる。

躱すとか、そんなレベルじゃなかった。

ただ目の前に、巨大な光が現れて、俺は飲み込まれていった。

「ガアアアアアアアアアアァァァァァァァ・・・」

住宅街に、強烈な光と叫び声が響いた。

第二話：森の中（前書き）

おはようございます、こんにちわ、こんばんわ。
作者の夏希です。

エア　フォース第二話でございます。
よろしくお願いします。

第二話：森の中

―紅葉、知っているか？

―なにをだよ。

（これは・・・・俺の記憶？）

―とあるアメリカの作家がいったんだ。
男は強くなければ生きていけない、
優しくなければ生きる資格がないと。

―いや、いきなり言われても意味わかんないから・・・。

―つまり、俺がお前に言いたいのは、強くなれ！　そして優しく！
そのまんまで分かりやすいだろ？

―確かにそうだけど・・・。なんで今それを言うんだよ。

（この声・・・親父なのか？）

―誰よりも大きく育て。
もし俺が会いにこれなくなっても、誰かを守れるだけの力を身につけるんだ。

―・・・・・まあ、分かったよ。

―よし！　じゃあ、お前にこれを渡そう！

これが、俺が見た最後の親父の姿。
その日もいつもと同じように、「じゃあな！」。
そう言って家を出ていった。

「んにょ・・・・・」

（いつのまに俺は眠っていたんだ？）

目をこすりながら、周りを見て回す。

「・・・・・・・・」

もう一度、目をこすって、頬を引っ張ってみる。

うん、痛い。
これは夢じゃない。

「どこだよ・・・ここ・・？」

俺が目を覚ました場所は、森の中。

俺の頭が正常だったのなら、こんな場所で寝るはずがない。

なら・・・・・

「なんで？」

キョトンと、しながら首をひねる。

（えっと、俺は寝る前に・・・・）

顎に手を当て、それっぽいポーズをとる。

「そうだよ！　あの仮面にやられたんだ！」

記憶を絞り出して、俺はようやく思い出した。

警官ロボから逃げて、帰ろうとしたときにあいつに襲われた。

でも、最後に見たあれはなんだったんだ？

さらに首をひねる。

しかも、目が覚めたら変な場所にいるし・・・。

どうなってる？

「だあああああああ、ちくしょう！」

どでんと横になる。

（訳が分からん）

森に吹く風が少し心地いい。

木の香り、鳥の声、ぽかぽかした太陽。

何か、今までの自分が馬鹿みたいに思えてきた。

『バキバキ！』

ほら、バキバキって爽快な音もする。

おまけに、地面は揺り篭のように揺れる。

「ふぁあ・・・・・」

なんだか眠たくなってきた。

『バキバキ！　ズシーン！』

なんだか響きのいい音が途絶えたと思ったら、俺を照らしていた太陽が隠れた。

「ん・・？」

急に寒くなってきたものだから、思わず片目を開ける。

それは、太陽と重なっているためよく見えなかった。

だが、俺の顔の横にダラダラと、なんだか汚い液がたれてきたことでちょっとした危機感を覚える。

上半身を軽く起こしながら、それをしっかりと確認しようとする。

見た目は3メートルくらいで、その表面はウロコに覆われていた。
口からは牙が何本も見え隠れしていて、眼には俺の姿が移りながらも輝いていた。

「おいおい・・・・冗談はおやめなさいよ・・」

ゴクリと喉を鳴らす。

『グルゥァァァァァァァァ！！』
「うひゃあああああああああああ！？」

俺は、またもダッシュする。
後ろからは、小さなロボット。

・・・・なら、まだ良かった。
あれはどう見ても恐竜か、ゲームとかに出てくるモンスターだ。

ドシンドシンと言いながら、恐竜は追いかけてくる。
距離は5メートルといったところだろうか。
恐竜は、その大きさからは想像できないスピードと俊敏さだ。

後ろを振り返る。

「どぅわあああああああ！」

半分涙目になりながら、逃げること１３分。

恐竜を巻いて、森から脱出。

『グァアアアア・・・』

遠くからまだ声がしてくる。

ここにも来るかもしれないので、慌てて移動する。

「というか、今日は走ってばかりだな・・・・」

いや、でも今日って表現の仕方は正しくないのか？

眠る前は夜だったけど、ここじゃもう朝だし・・・。

「お！」

考え事していると、少し遠くに街らしきものを発見。

でもその街は、日本とは全然違う作りのようにも見えた。

「とりあえず行ってみるか」

そう言って、街へと向かった。

一人の少年が、街へと向かって歩いている頃。

森の中では、全長3メートルはあるであろう恐竜が暴れていた。

少女は、強大な力を感知してここまでやって来たのだが・・・・。。

「こいつのせいなの？」

一人つぶやき、途中拾ってきた石を恐竜へと思いっきり投げつける。

『ギュアァア！』

少女の存在にようやく気がついたのか、ギロりと目をむき出している。

「そんなわけないか・・・」

かなり残念そうな少女は目を瞑り、ため息混じりに唱えた。

「――破壊の雷よ、滅せ。」

少女が目を開けるのと同時に、轟音と衝撃が森中に響いた。

恐竜がさっきまでいた場所には、大きなクレーターのようなものができていた。

少女は、ここに来る途中に突如感じた大きな力。
その正体を探りながら声を漏らす。

「あれほどの力・・・一体あなたは誰なの？」

第二話：森の中（後書き）

こんな作品を読んでくださってありがとうございます！

次からは、最悪でも二日に一話程度のスピードで更新していきます！

第三話：ヤンキーとフード（前書き）

おはようございます、こんにちわ、こんばんわ。

夏希でございます。

第三話始まりました。

よろしくお願いできたらなーと思います。

第三話：ヤンキーとフード

あれから何分もしないうちに、俺は街へとたどり着いた。

途中で、なにやら大きな音が森から聞こえてきたのだが、さっきの恐竜が暴れているのだろうか。

「おお・・・」

街は遠くから見るとそうでもなかったが、入口まで来てみると結構なでかさだった。

中に入り、少し歩いてみる。

通り過ぎる人々の格好は、まるでファンタジーゲームに出てくるような格好をしていた。

しかも、その人々の視線が俺に集まっている。

（なんか、これも最近体感したような・・・）

ちょっと照れながらうつむく。

（どこか、情報がもらえそうな場所はないかな・・・・）

俺は、とりあえず情報が欲しいと思ったのだ。

街に入ったときに、雰囲気からして外国なのかとも思ったが、歩いている人たちの顔は日本風で、屋外のカフェ的な場所から聞こえてくる話声も日本語だ。

（まったく、ここはどこなんだよ・・・）

ますます訳が分からなくなってきた。

（お！　あそこなんかで情報が聞けたりしないかな？）

俺は、人々が集まっている場所を発見。

何かを中心に囲んでいるようにも見えたが・・・。

「ねえ、これは何やってんの？」

気になった俺は、近くにいた男に話しかけてみた。

男は、俺の方を見てしばらく顔を顰めていた。

「聞いてる？」

おぉう！？

と、驚きながらも男は答えてみせた。

「喧嘩らしいぜ。あの顔を隠してるほうが、ヤンキーに吹っかけたらしい」

俺は、人ごみの中心に目をやると確かに見た目ヤンキーがいた。

その前には、男に胸ぐらをつかまれているグレーなフードを被っていて顔が見えない。

それを俺もしばらく見ている。

ヤンキーはガミガミと怒鳴りつけているが、対してフードは黙ってそれを聞いてるだけだ。

「てんめぇ・・・・！」

俺が見物し始めてから、３分位たった頃だろうか。

無視し続けるフードに、ヤンキーはさすがに痺れを切らしたようだ。

「なめんなよ！」

さすがヤンキー。

なんとも古臭いセリフを使ってくれる。

しかし、大きく振りかぶったヤンキーの攻撃はハズレ、見事に空気をつかんでいた。
フードはいつの間にかヤンキーの腕をすり抜け、気が付けば人ごみの中に紛れ込んでいた。

「フン、だから止めとけといったのだ。お前程度では相手にならん」

「なっ・・・・・んだと、てめえ！」

俺から見ても、ヤンキーじゃあのフードには、一撃も食らわせれないだろう。
ヤンキーが本気を出していないなら別だが、それはないと思うし。

なんとも無謀なヤンキーは、フードのいる人混み目掛けて走った。
見物者は、慌てて退散。

「やれやれ、まだ来るのか？　どうやら、一度力の差を見せてやらねばないらしいな」

「余裕こいてんじゃねえ！　これが俺の＜エア＞だ！」

そう言った後、フードの周りが急に爆発した。

何が起こったのかよく理解できなかった俺だが、ヤンキーの攻撃は

止まらない。
ヤンキーが次々と爆発を起こした（？）せいで、辺りは砂ぼこりが立ちこめっている。

「ゴホッ・・ゴホッ・・・」

実は、隠し球を持っていたのか。

（これはとんだ誤算だったな・・・。）

心の中で呟く。

数秒したところで、ようやく見晴らしが良くなっていく。

「ハッ、跡形も無く散ったか。俺をなめて掛かってくるからそうなるんだよ！」

お前は馬鹿カッ！？
って思いっきり突っ込んでやりたい。

ヤンキーによる、爆発はすごかった。

ただ、すごかったが跡形もなくは無理じゃないか？
普通骨は残るだろうし、フードがこれくらいでやられるとも考えられない。

その時だ。
ヤンキーが横方向にぶっ飛んだ。
目測だが、軽く１０メートルは飛んだのじゃないだろうか。

その一方で、先程までヤンキーが立っていた場所には、フードがいた。
俺が考えていたとおり、フードは生きている。

そして言った。

「ほら、立ってみせろ。まだ終わったわけじゃないぞ！」

ヤンキーは力を振り絞って、なんとか立ち上がろうとしている。
そこへフードが駆ける。

「ほらほら、さっきまでの威勢はどうした！？」

まだ完全に立ち上がっていないのに、フードは容赦なく蹴りを入れる。

見物者も、見るのに耐え難いのか、その場を離れるものが増えていた。

「ゴハッ・・・・・！」

ヤンキーが血を吹き出す。

それを見てもフードは止めようとしない。

「おいおい、こんなとこで物騒なもんはやめてくれよ・・・・」

近くの男が深刻な・・・・青ざめた表情で言った。

さすがに俺もこんなのは見たくはない。

余りにも一方的すぎて、話になっていない。

「クッ・・・・・・！」

俺は拳を作って、思い切り力を込める。

爪が肉に食い込んできて、タラタラとなにか生暖かいものが流れ出た。

必死にこらえる。

ここで俺が助けてもいいのだろうか？

「ガハッ・・・・・！」

攻撃が止んだところで、ヤンキーが息を吸い込もうとしている。

「フッ、これで分かっただろう。貴様程度、私たちの相手などではないわ！」

フードは腰に刺していた剣を、音を立てながら抜き取った。

（あいつ、本気か！？）

そうでないと信じたいが、口元からは不気味な笑い声を発している。

「くそ！　悪いがこいつを借りる！」

俺は近くにいた男から、ほとんど無断で剣を抜き取り０から一気に加速させる。

―風が俺の頬を撫でる。

―見物者からは、女性の悲鳴も聞こえてくる。

目を閉じる。

二人とも距離は、８メートル。
既にフードの剣は降りおろされている。

（頼む、間に・・・・

「間に合えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

『ギャイーーン！！』

金属同士がぶつかった。

俺の剣と、フードの剣だ。

どうにか間に合った。
心の中で、少しだけ安心する。

「誰です、あなたは？」

フードは先程までの狂気をどこかに、静かな声で聞いてきた。

「こいつを助けにやって来た、ただの乱入者だ」

剣を重ねながら、俺は後ろにいるヤンキーをちらりと見る。

「もう十分だろ？　こいつはもう立てないんだぞ？　これ以上痛めつける必要がどこにあるんだよ！？」

最後の一言は怒鳴った。

それまでにヤンキーのやられ用は酷かったのだ。

「ただの乱入者のあなたに何が言えるのですか？　邪魔です、退いてください」

フードが殺気を放ってくる。

軽くひるんだが、この程度でやられる俺じゃない。

「それは・・・できない」

辺りが静まり返った。

誰もが俺たちの行く末を観察している。

「そうですか。それは残念です、犠牲者がまた一人増えたわけですから！」

フードは一度剣を引き、俺の体制を崩してきた。

崩れた体制からフードの方を見ると、めくれた場所から狂喜の表情を見せていた。

「さよなら、お元気で」

静かに、ニヤニヤしながら俺に向かっていった。

「悪いが、まだ死ぬつもりはないんでな」

「え！？」

フードは、自分の肩に置かれている重さを確かめながら、驚いていた。

それもそうだ。

なんせ、今自分が切りつけたハズの男が、逆に剣を突きつけている。

汗がじわじわと浮かんでくる。

「分かったか？　お前程度では、俺には勝てない。敗北を悟ったのなら、立ち去れ」

低い声で、威圧感を与えながら提案した。

「・・・だ・・・・・・まだだ！！」

提案は受け付けてはもらえなかったようだ。

「はぁ・・」

非常に残念な表情をする。

フードは、クルリと剣を握ったまま一回転してきたが、俺は既にフードの後ろに回り込んでいた。

「なっ・・・・・・！？」

なぜまた後ろを取られている！？

といったところだろうか。

「くぅっ・・・・・・」

「どうせ、今の攻撃も見えてなかったんだろ？」

しかし、フードは一度距離をとり剣を構え直す。

これはいい判断だと思う。

ん？

なんか、フードの周りにあた物や、見物者の剣がふわふわと浮いているんだが・・。

その時、後ろから声がした。

「クソッ・・、そいつの＜エア＞はヤベェ！　早く逃げろ！」

それは倒れこんだままのヤンキーだ。

エアって、さっきヤンキーが使ってたやつみたいなのか？

っていうことは・・・・。

俺がヤンキーの言葉を察したときには、フードのエアは完成していた。

「ハハ・・・・・こいつは・・」

フードの頭上には幾選の剣が舞っている。

標的はもちろん俺たち。

笑えない冗談だ。

これは・・・・・・もう、うん。

「戦略的撤退だ！」

大きく叫び、俺はヤンキーをおんぶし、速攻で消え去る。

後ろからは、大量の剣を従えたフードが追ってくる。

こうして、本日（？）３回目の鬼ごっこは始まった。

―かと思いきや、フードは案外あっさりと諦めてくれた。

「ハァ・・・ハァ・・・ハッ・・」

細かく呼吸をして、高まる心臓を静める。

ちらりと横にいるヤンキーの方を見てみる。

なんだかぐったりとしながら壁に寄り添っている。

「あの・・・大丈夫ですか？」

ぴくりとも動かないので、声をかけてみる。

・・・・・・・・。

返事がなかなか来ない。

「ああ、悪いな。少しボーっとしてた」

よかった、意識はあるみたいだな。

「お前、名前は？」

ヤンキーが俺に聞いてきた。

「俺は、一条　紅葉（いちじょう　くれは）。最近１６になった」

「紅葉か・・・。俺は冬月　翔（ふゆつき　しょう）だ。紅葉と同い年だな」

この人俺と同い年なの！？

正直言ってかなり驚きだ。

見た目からして、１９はいってると思ってたのに・・・・・。

やっぱり見た目で人を判断するのはいけないな。

「改めて礼を言わせてもらおう。ありがとう」

「いえいえ。こっちとしてもいろいろ聞きたいことがあるんだけど・・」

「別に構わない」

「それは良かった。よろしく」

赤い夕焼けに照らされながら、俺は手を指し伸ばす。

翔も、軽く笑いながら握ってくれた。

「こちらもよろしく頼む。お前から学べそうなことがありそうだしな」

手を握ったまま翔を立たせる。

「それで、どこかゆっくりできる場所に行きたいんだけど」

このままでいるのもなんだし。

「ああ・・・それならこの通りを真っ直ぐ歩いていけばカフェみたいなのがある。そこがいいだろう」

そう言われ、俺は翔の肩を担ぎながらカフェへと向かうのであった。

第三話：ヤンキーとフード（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

今回は何かスゲー微妙な感じで終わったのは気にせず、スルーで。

いや、言い訳でしかないんですけど、この世界についての説明が思ったより長かったので、次回にします。

そして、次回の次から本格始動！

第一章が始まりまっす！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8612y/

Air force

2011年11月27日12時52分発行